

カキ加温ハウスにおける熱帯果樹の栽培適性検討

～温暖化を逆手に、新規品目による収益補完の可能性を探る～

カキ加温ハウスにおいて収益補完を目的とした熱帯果樹栽培を試行したところ、アボカドとライチは冬期の無加温期間に目立った低温障害がみられず、栽培できる可能性が示唆されました。

1. 背景と目的

奈良県のカキ加温ハウス栽培は全国1位の面積を誇っています。しかし、近年は資材高騰に加え、果実の着色遅れなど温暖化の影響が経営上の課題となっています。一方で、温暖化は熱帯果樹類などの新規品目導入の契機となる可能性も指摘されています。そこで、ハウス内の空きスペースで熱帯果樹を小規模にポット栽培することで、収益を補完する方法を検討することになりました（図1）。

カキの加温ハウス栽培では、低温で休眠を打破するための無加温期間があります。この時期に熱帯果樹に低温障害が生じる可能性が最も懸念されたので、冬期に数種類の熱帯果樹を供試したポット栽培試験を実施しました。

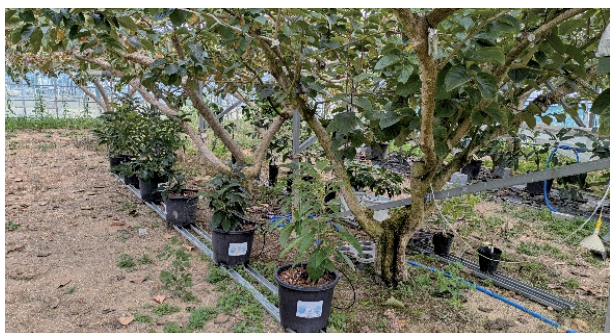


図1 カキ加温ハウス内の熱帯果樹ポット栽培

2. 研究成果の概要

供試品目はアボカド、ライチ、コーヒーおよびパパイヤとしました。これらを選んだ理由は、知名度が高く需要が見込める一方で、国内でまだ大きな産地がないため、ネット直売などで少量高単価販売が期待できると考えたためです。

2024年11月1日に、1年生ポット樹をカキ加温ハウスに搬入しました。翌年1月15日に加温を開始するまでのハウス内の最低気温は12月20日の-2.3℃となりました（図2）。

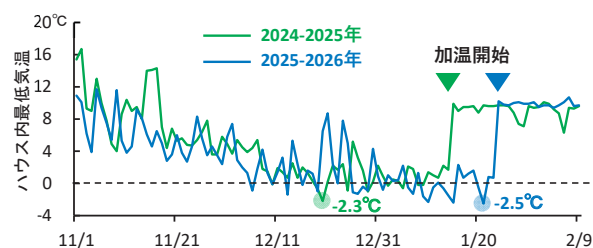


図2 試験期間中のハウス内最低気温の推移

この間に、コーヒーとパパイヤでは葉が先の方から徐々に枯れ、最終的には株全体が枯死しました（図3）。一方、アボカドとライチでは枯死や目立った障害はみられず、春以降は問題無く新梢が発生しました（図4）。また、アボカドとライチについては2025年にも同様の試験を実施し、ハウス内最低気温は-2.5℃となりましたが（図2）、このときも障害はみられず、栽培適性が示唆されました。



図3 低温による
枯死



図4 春以降の萌芽の様子

3. 実用化に向けた対応

アボカドとライチは最大の懸念事項であった耐寒性の問題をクリアできる可能性が高いと考えられました。しかし、生産現場での栽培を進めるには、安定着果を実現する栽培管理法、カキへの農薬散布時のドリフト防止策など、まだ多くの課題が残されています。今後も栽培試験を進め、実用的な栽培技術の確立を目指していきたいと考えています。

（果樹・薬草研究所 米田健一）